

ヲ大東山堡軍司令部ニ集同セシメ次ノ戦闘ニ関シテ
訓示セラルル所アリ本職ハ命ニ依リ次ノ戦闘間ニ
於ケル野主上ノ用意ヲ洞見シ諸官ヲシテ前ノ黑溝台
附近

大石 汎

門土社総合出版

美神と軍神と

日露戦争中の森鷗外

ルコ
記ヲ
作業
諸官

ヲ努メ後之が筆
隊及野戰病院ノ
二月ヲ以テ関係

戦闘ニ先ダテ軍隊區分ニ從ヒ第五師團ハ第二軍ニ
第六師團ハ第四軍ニ隸属スルヲトナレリ是ヨリ先キニ
月十八日滿州軍總參謀長ハ軍隊區分ニ從ヒテ轉属

おお いし ひろし
大石 汎

1939 年，石川県金沢市に生まれる。

早稲田大学国文科卒。

著書に『大石汎脚本集（高校演劇叢書第六巻）』

『ぼくの百人一首』

『日清戦争中の森鷗外』（いずれも門土社総合出版刊）などがある。

現住所 横浜市栄区桂町 279-2

美神と軍神と

著者●大石 汎

編集●田邊道子

発行所●門土社総合出版株式会社

横浜市戸塚区下倉田町 1478 番地 ☎ 045(864)0244 番

発行者●小澤紀子

昭和60年7月9日 初版第1刷 発行

平成5年1月12日 改版第1刷 発行

制作●同林工房／印刷製本●藤原印刷

©1993 Oishi Hiroshi

ISBN4-89561-149-3 C0095

大石 汎

美神と軍神と

日露戦争中の森鷗外

門土社総合出版

美神と軍神と

装訂 黒川百合子

序

本書は昭和六十年七月九日門土社総合出版刊行の「美神と軍神と——日露戦争中の鷗外——」を再刊したものである。但し副題を——日露戦争中の森鷗外——とした。僅か一字を加えただけだが、こうした推敲は本文の各所に及んでおり、誤記誤植を正したものと併せて、初版よりも多少読み易い本になっている筈である。

本書は日露戦争中の鷗外の足跡をたどり、その陣中詠「うた日記」の背景にも触れた論考がもとなっている。しかし一冊の本にしてみると、鷗外を論ずるばかりでなく、鷗外と共に日露戦争を戦った先人達の姿を描くことにもなっているようだ。版を重ねるにあたって読み返していいよその感を深くする。私としては再版の本書を、作家論でありかつ日露戦争側面史でもある一冊として世に問うてみたい。そこで巻末に参考文献解説を付して作家研究書の形をとる一方、戦闘経過を追った年表及戦地地図を示し、ささやかながら一巻の「戦史」の体裁をもととのえたのである。

鷗外凱旋八十七年の後

平成五年一月十二日

著者

目次 ● 美神と軍神と——日露戦争中の森鷗外——

序……………3

一、森第二軍軍医部長……………金州・得利寺の戦闘……………6

二、流血の外交……………遼陽・沙河会戦……………24

三、寒気を敵として……………沙河対陣・黒溝台会戦……………44

四、戦う「文学ノ泰斗」……………軍人鷗外の面目……………63

五、執拗な戦闘……………奉天西部平野での決戦……………79

六、赤十字旗のもとに……………露軍留置病院問題Ⅰ……………96

七、グチュコフ対鷗外……………露軍留置病院問題Ⅱ……………112

八、「臨時報告」は語る……………	奉天会戦後の第二軍……………	128
九、「余力庭園ヲ構築」……………	慶雲堡・古城堡の日々……………	145
十、森軍医監の凱旋……………	鷗外・その事業の壮観……………	163
初版後記……………		182
参考文献解説……………		187
年表……………		198
地図……………		204

一、森第二軍軍医部長

——金州・得利寺の戦鬪

鷗外が小倉から母峯子にあてた手紙の断簡に、次のような内容のものがある。

——このたび陸軍の礼式が改正されて、軍医などの相当官は将官待遇となつても、敬礼の際ラッパを吹かれないことになった。ラッパなどは些細なことのようにだが、敬礼の際に吹かれる曲は「海ゆかば」の譜であり、天皇陛下のためにいつでも死ぬという意味のものだから、それを吹かれないということになると軍医社会の志気にもかかわると思う。自分が在京していたならば、このような規則改正に対しては位置を賭しても闘つたであらう。まことに不愉快なことだ。——

鷗外森林太郎は生涯軍籍にあり、軍医の最高位軍医総監（中将相当官）、陸軍省医務局長に至るまで、精励な軍人として進退した。だが軍医官は主計官と同様、後方任務が専門の言わば形式上の軍人である。階級名にも相当官の号を付されるなど、第一線の兵科の軍人とは異なる扱いを受けることが多かった。常に勅諭の聖旨を引いて部下を督励し、本物の軍人としてふるまっていた鷗外にはそれが面白くなかつたのだ。ラッパの吹奏は鷗外も言う如く、軍人にとっては些事に似て些事ではない。軍人は何よりも素朴な榮譽の表現を重んずるものだからである。

ラッパの件で位置を賭すとまで憤慨した鷗外が、後年軍医総監になつてから、文字どおり位置を賭し

て闘った事件がある。日露戦争も終り平和な時代となった明治四十五年、陸軍省では人事系統の改正問題がもちあがった。このたびは先年のラッパ一件とは、全く議論の筋が違っていた。曰く「軍医官、衛生部士官といえども、統帥に服する軍人である。その人事権を医務局が握っているのはおかしい。兵科の士官の人事と同様、すべて師団長、陸軍省人事局の系統に改めるべきだ。」

いつの世にもあるスジ論である。とりわけスジでもっている軍隊では、統帥云々の議論の前には異となえうる者はない。鵜外の部下医事課長山田弘倫が、軍医官の特殊性を主張してがんばったが焼け石に水だ。ついに衛生部と似た立場にある経理部は、やむなく改正案に同意するに至った。ここで医務局長森林太郎は、医務局の人事権が失われるならば局長を辞任する旨を陸軍次官に申し入れ、あくまでも抵抗の姿勢を示した。山田弘倫の回想によれば「武士道の上から反対だ」と鵜外は強調したという。結局、紛糾を恐れた軍務局長田中義一（のち首相）が間に入り、長老山県有朋の示唆もあって、衛生部人事系統は従来どおりということになった。

「コップの中の風ではないか」と言うこともできよう。だが、官衙に職を奉ずる者にとって、その所管を守ることは生命を守ることに等しい。軍人が戦場で自分の持場を守るのと何等変らないのだ。「武士道の上から」という表現はだからすこしも大袈裟ではない。

今となつては鵜外は文学史上の人物であるが「鵜外は文学者であつて、軍人は仮の姿だ」というのは後世から見た結果論である。もし鵜外が文学者としての業だけに集注して、所管が奪われそうになっているのを雲煙過眼視するような人物だったならば、軍医総監医務局長森林太郎は生れなかつたであらう。そしてその地位に立つての文学を含めての業績も残らないのである。軍人としての鵜外を、あるいは鵜外が軍人であつたことの意味を、軽視してはならない。

壯年四十三歳の時、鵬外は第二軍軍医部長として日露戦争に従軍した。参謀本部編「日露戦史」によれば、第二軍は出征軍中最大の規模を有し、旅順攻囲以外のほとんどすべての戦闘に主力となつて戦っている。その軍の衛生関係の最高責任者であつたのだから、単に従軍したと言うより、司令部の一員として日露戦争に参画したと言うべきかもしれぬ。

鵬外が陣中で詩歌集「うた日記」を作り戦後出版したことはよく知られている。一卷の詩歌集を凱旋の土産にするとは、何という雅やかさであろう。まさに詩精神、文学精神の勝利である。詩人佐藤春夫は「うた日記」に大いに傾倒して「陣中の竖琴」と題する注釈を書いた。「陣中の竖琴」すばらしい題だ。戦場の鵬外を象徴しているかのようだ。かくて日露戦争に於ける鵬外像は、砲弾雨下の中にあつて竖琴を奏でる美神ムーサイの使徒であり、軍人としての役割は忘れられがちだったのである。

近年、陸上自衛隊衛生学校で「第二軍軍医部長臨時報告」が発見された。これは鵬外が上官の野戦衛生長官小池正直（当時医務局長）にあてて、出征軍の衛生状態を報告したものの綴りである。衛生学校の資料室「彰古館」で、私は浩瀚な原本を閲読することができた。「於母影」の詩人「舞姫」の作者、そして「うた日記」のオルフェウス鵬外が、多くの詞藻をつづった文字で、戦争という美神に見放された世界を克明に記録していたのだ。さらに「彰古館」の書架には、第二軍麾下の各師団軍医部長から「第二軍軍医部長森林太郎殿」にあてた報告が多数収められていた。各師団の報告には、前線の戦闘部隊の衛生隊配置図など具体的なものが多く含まれており、鵬外はこれらを取捨選択して「臨時報告」を作成したのである。それにしても、散佚をまぬがれたものだけだというのに相当な分量だ。情報過多は何も現代だけのことではない。日露戦争の戦野を、砲弾と一緒にこうした書類の束も飛び交つていたのである。「臨時報告」によって美神ムーサイに仕える鵬外の姿は次第に後退する。これはむしろ軍神アーレスの

管轄ではないか。そのとおりだ。鷗外は美神と軍神との二つの神に兼ね仕える人として陣中にあり、かつ人生を歩んだのだ。

明治三十七年三月十六日、第二軍が編成され、同二十三日から広島へ部隊の集中が開始された。「臨時報告」の冒頭には、各師団および兵站の軍医部長に訓示された「第二軍外科方鍼」が記されている。

「一、出征軍医ノ用意ハ手術心ニ動カサレザルニ在リ」で始まる簡条は、戦場での負傷兵の手当の大方針を示したもので——手術はなるべくさけること、危険のない留丸（体内に留まった弾丸）は取出さなくてもよい、とにかく包帯をしておけばたいいの傷はよくなる——という拙速治療法ののべられている。「臨時報告」原本のどこどころには、上官小池の書入れた短評、サイドライン、または○×？といった記号、MK（小池正直）のイニシヤルなどが見られる。「外科方鍼」の欄外には「本方針ナルモノハ鶴田軍医部長ノ立按ナリト信ス若シ他軍ニ及ホスノ利アリトセハ参考トシテ普ク配布スルモ可ナラン研究ヲ要ス」とあった。

第二軍は四月二十一日字品を出港、集合地鎮南浦（朝鮮北西部海岸）へ向かった。「うた日記」にはここで得た「浪のおと」がある。

浪のおと（明治三十七年五月二日於鎮南浦）

おとづれたえて はや十日

君をおもひて いもねざる

夜半のあはれを おもふやと

いふ聲きけど 人はなし

大同江の

浪の音

ゆきまししより

ふた月の

日々に愛しさ

まさりゆく

子の兒^こ見まく

ほしきやと

いふ聲きけど

人はなし

大同江の

浪の音

ますらたけをは

かなとでの

そのあしたより

たまきはる

命をすてし

ものなるを

おろかや何を

ささやきし

大同江の

浪の音

九連城は

おちいりて

震ひをのく

遼陽軍

餘喘をたもつ

旅順兵

はや撃てとこそ

よばふなれ

大同江の

浪の音

「うた日記」中もつともよくまとまっている作品であろう。措辞にも不自然なところはないし「大同江の浪の音」のリフレーンも力強い。佐藤春夫は「陣中の堅琴」の中で「第一連の声は誰の声かわからぬが、第二連の声は明らかに夫人の声である。また第一連の声も夫人の声と解せぬことはない。ともかく詩を味わうためにはわかる必要もないことで、その詮議はゴシップ屋にまかせておけばよい」などと言っているが、詩人にしては几帳面な説をなしたものだ。この詩の意は明白、様々な思いを抱いた人々が、それをふり切つて戦場へ赴く様を歌っているのだ。だから第一連、第二連の声も、特に鵬外が聞いた声と解する必要はない。——ある人は大同江の浪の音に愛する人の声を聞き、ある者は妻子を思う、しかし今は一切を忘れて戦う時である——ここで大同江の浪の音は戦士の雄叫びにかわるのだ。ともかくこの詩に、ゴシップ屋の出てくる余地はない。

「浪の音」一篇が緊張感のある作品になっているのは、当時の状況の反映であろう。鎮南浦に集結した第二軍の船団は七十二隻、海軍の護衛のもと「大同江の浪の音」に送られて五月三日抜錨上陸地に向かった。船団を安全に通すため、五月二日夜から三日にかけて旅順口第三次閉塞が決行された。閉塞船隊は船団より先に、同じ鎮南浦を出港した。博文館特派員田山録彌（花袋）の「第二軍従征日記」には、閉塞船隊の将校が写真撮影に來た記者にむかつて「君のために死ぬのだから、もうすこしも思い残すことはない」と語り記者が感動する場面がある。

第二軍そのものも、閉塞隊に劣らぬ敵中挺身隊であつた。「戦史」によれば大本營の第二軍に関する作戦方針は次のようなものだ。

第二軍ハ遼東半島ノ登沙河河口ヨリ大沙河河口ニ至ル海岸ニ上陸シ北ハ普蘭店ヨリ大沙河ニ至ル線南ハ金州大連附近ヲ領有シ以テ大連附近ニ根拠地ヲ成形シテ爾後第一軍ト呼応シ敵ヲ求メテ之ヲ攻撃スルニ在リ。

日露戦争に参加した軍団の中で、第二軍ほど広範多岐な任務をおびていたものはない。したがってその編成も、当時考えられるかぎりの最強力なものであった。鴨緑江を渡って九連城を抜いた第一軍が、通常の師団を三個合わせただけであるのに比べて第二軍は三個師団（一・三・四師団）に砲兵旅団（野砲一〇八門）・騎兵旅団が加わり、新兵器機関砲（四十八門）を有していた。

五月五日、第二軍は第三師団を先頭に候児石（大連東北方六十キロ・大沙河河口附近）に上陸した。「戦史」や「従征日記」によっても風浪に悩まされたことは書かれているが、敵の抵抗は全くなかった。敵中上陸としては意外な成功である。軍は着々と占領地を拡大し、五月七日には早くも第三師団第三十四連隊の一部が普蘭店（候児石より西へ二十五キロ）に達し、東清鉄道の遮断を試みている。

上陸後数日は小競合い「戦史」の表現によれば「小戦」をくりかえすだけであったが、その結果南方に敵が多く北方に少いことが判明した。南方の敵はその最たるものが旅順の要塞である。また旅順の五十キロ東北方金州城附近の南山には、フォーク少将の率いる支隊が堅固な陣地を構えていた。この南山を攻略することが、第二軍の当面の作戦目標となったのである。

南山攻撃準備中の五月十七日深夜、車家屯（候児石より西北へ十六キロ）の司令部が敵襲の報に驚かされたことがあった。「うた日記」の中の「敵襲」は戦場の雰囲気をよく伝えている。当時軍の戦闘部隊は、第一・第四師団が南山に向っており北方には第三師団が配されていた。中間の司令部はほとんど

敵襲の恐れはない状態である。だが、哨兵が発砲し敵襲を叫ぶ。橘管理部長（橘周太・遼陽で戦死）は佩剣をつけて飛び出す。鷗外は司令部に残っている者の中ではもっとも階級が上だったので、わずかな衛兵を指揮するために刀を執った。

事実上非戦闘員である軍医もやはり軍人だ。こういう場合には指揮をとることが要求される。鷗外が二期にわたって校長をつとめた軍医学校の教科には、戦術学・地形学も含まれていた。また小倉日記にも、衛生部の士官達が師団参謀を講師にして戦術の勉強をしたという記述がある。鷗外もひととおり以上の軍事的素養はあったと考えてよい。いずれにしても本格的な敵襲であったならば、鷗外漁史は必ずやコサツクの馬蹄の塵となっていたであろう。橘中佐にさががけて「軍神」が誕生したことは確実だ。当然中年以後の「史伝もの」は残すすべもないわけだが「於母影」の詩人と軍神との間の振幅の大きさは、尽きぬ話題を今日に至るまで提供しつづけたであろう。

事實は哨兵の誤りであった。「従征日記」に引かれている鷗外の言葉によれば「発砲した哨兵といふのが少し神経質で、今日軍医部に診察に来ていたが、幻影に敵を見てそして発砲したと言ふ始末でそれは実に馬鹿馬鹿しい話さ」ということになる。「敵襲」の詩は実際よりもドラマティックに構成されているようであり、二首の反歌でむすばれる。

かつて知らぬ我となおぼし星のもとにひとみ合はする死のおほきみ

まのあたり死の大王怖ぢさりし己が心を憎みけるかな

「死のおほきみ」とは少々異様な表現だがこれは、仏足石歌に見られる古い言葉だ。日露の戦場に現われた「死の大王」は、どのような姿をしていたのであろうか。

五月十九日、増援の第五師団が楊家屯（侯児石南方）に上陸して北方に展開し始めた。そこで第二軍は、これまで北方に配していた諸隊をすべて南山方面へ投入する。戦雲まさに急である。ところが戦闘開始直前の緊張の中にある五月二十三日の「臨時報告」には、例の「外科方鍼」の起草者が誰であるかについて細々とした釈明がなされている。決戦をひかえていかにも細事にこだわっているようであるが、細事にこだわるのも鷗外の仕事のひとつだ。敵襲の虚報と書類の戦争、後方任務もまた多忙である。

五月二十五日夜、第四師団第十九旅団の金州城夜襲によって南山の戦闘は始まった。この夜襲は失敗する。咫尺を弁じ得ぬ闇で隊列が混乱し、ようやく城壁に達した工兵も折からの雨のため爆薬に点火できなかつたのである。つづいて進んだ第七旅団の攻撃も要領を得なかつた。結局別方面から第一師団が城門を爆破して突入、金州城を占領した。時はすでに五月二十六日午前五時すぎ、夜来の雨につぐ濃霧が晴れかかる頃、砲兵旅団・師団砲兵合計百九十八門の野砲がすべて南山に指向されて火蓋を切った。一方歩兵も徐々に包囲の輪をちぢめる。

南山は遼東半島が細くくびれた幅四キロ足らずの地峡にある標高百十五米の小山である。この狭い地域に三個師団・砲兵六個連隊を集注した第二軍の攻撃は猛烈をきわめた。六時五十分頃、南山の応射は次第に間遠になり八時には全く沈黙する。重砲を含んでいたとはいえ、南山のロシア軍の砲は六十門程度であつたから当然の結果であろう。ところが、敵砲火の衰えるのを見て突撃に移った歩兵は山麓の機関銃の射撃に会い、戦闘は意外に長びいた。

南山の戦闘後の六月八日、鷗外は「第二軍南山攻撃前ヨリ該戦闘後二至ル本職ノ処置左ノ如シ」で始

まる長文の報告をまとめて発信している。戦闘中の軍医官の行動がよくわかり、また「戦史」とも符合するところがあって興味深い。「二十六日南山戦闘中本職ハ軍司令官ト共ニ初メ朝陽寺西方ノ高地ニ在リ尋イデ肖金山ニ移ル戦闘後肖金山下ニ露営ス。」この簡潔に記された一日の間に、鷗外は多くのものを見たのである。南山の戦闘は「うた日記」の中に作品となつて残されている。

いくつかの短歌、敵弾に倒れる旗手の姿を写した「けふのあらし」突撃前の歩兵の表情を描いた「唇の血」などだ。

時はこれ 五月二十五日 午後为天 常ならば 耳熱すべき 徒歩兵の 顔色は 蒼然として 目
かがやき 咬みしむる 下唇に 血にじめり

「唇の血」の一節である。これこそ鷗外の身にも近寄ろうとしていた「死の大王」に現実には直面している人々の表情だ。ついにながら、初版以来「時はこれ五月二十五日」となっているのは誤りであろう。南山攻略は二十六日だからだ。「臨時報告」がはからずも「うた日記」の日付の誤りを指摘しているわけだ。「うた日記」の中の絶唱と目され、鷗外の詩の中でも最も有名な「ぼたん扣鈕」もこの時作られた。

扣鈕

南山の たたかひの日に
袖口の こがねのぼたん
ひとつおとしつ